

いのちかがやいて

■ 楽曲データ

歌詞：石本美由起 作詞

楽曲：あきたかし 作曲

発表：安芸教区 1994年

初演：「安芸教区全戦没者追悼法要・原爆50回忌法要・本願寺広島別院復興30周年記念法要『かがやきあういのち』の集い」 1994年7月1日

初出：－

管理番号：M0557

■ 創作の経緯

「安芸教区全戦没者追悼法要・原爆50回忌法要・本願寺広島別院復興30周年記念法要」の記念オリジナル作品として制作。作詞者・作曲者ともに、広島に縁の深い人物。詞について、石本美由起は「法要記念事業のシンボルマークである『共命鳥』をテーマに、未来への愛と願いの讃歌としてまとめた」と語っている。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第6巻収録

底資料：『清風宝樹』 安芸仏教音楽連盟 2003年

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

◆ 作詞者について

作詞の石本美由起さんは、1924（大正13）年、広島県大竹市に生まれました。1948（昭和23）年、《長崎のザボン売り》《憧れのハワイ航路》で作詞家としてデビュー、キングレコード専属となります。以来、半世紀以上にわたって演歌一筋に作詞を続け、美空ひばりさんが唄ってヒットした《悲しい酒》、2年連続で日本レコード大賞に輝いた《矢切りの渡し》《長良川艶歌》など、大ヒット曲を生み出しました。読者のみなさんもお存じの演歌があるのではないのでしょうか。

石本さんの作詞は、万葉の時代から脈々と流れる五七調・七五調の定型詩に、その時代その時代の人間の哀感を織り込んだもので、私たちの心を打ち、忘れられない演歌として唄い継がれている曲が多数あります。2009（平成21）年に亡くなるまで、4000曲を超える作品を発表しました。

◆ 詞について

「共命鳥」とは、『仏説阿彌陀經』に登場するお浄土の鳥で、妙なる法を説くといわれています。美しい鳴き声もち、顔は人間で身体は鳥、ふたつの頭を持ち生死を共にするそうです（『真宗新辞典』より要約）。この「共命鳥」をテーマの柱にした、と作詞者の言葉にあるように、歌詞には繰り返し「共命鳥」が詠みこまれていて、いのちを共にしているお互いが一人ひとり「輝きあおう」と歌いあげています。

1番では、人には人の、花には花のいのちがあり、それを慈しみながら共に生きていこう、という願いが歌われています。

2番は、原爆を被爆した多くの方々が水を求め、広島市内を流れる太田川で多くの人びとがいのち終わっていかれた情景を思い浮かべさせます。また、前述の巻頭言に「私たちは、先の戦争では被害者であるとともに、加害者でもあったとも言えます」という言葉が背景にあるといえます。

3番では、手を取りあって平和の道の同朋として生きていこう、という願いが力強く歌われています。

◆作曲者について

あきたかし（本名・水野喬）さんは、島根県仁多郡横田町（現・奥出雲町）生まれで、中国放送でラジオ番組やスポーツ番組などのディレクターをつとめました。「広島之歌づくり」を手がけるなど、数々の歌を作詞作曲しています。

◆歌い方について

①出だしの音が低いので、無理に押えつけないように歌いましょう。

②12小節目「あり」の「あ」の発音をはっきりと歌いましょう。16小節目も同じように。

③18小節目の1拍目は、発音をはっきりと。

④23小節目から25小節の付点2分音符へ、十分にクレッシェンド（だんだん強く）して、次のフレーズに入ります。

⑤30小節目からの繰り返し部分では朗々と、また、のびのびとした声で歌いましょう。

⑥33・34小節目の長い音（7拍）を十分に保つよう、練習しましょう。

◆用途

1997（平成9）年秋の御堂演奏会で演奏され、全国に広まっています。追悼法要などで歌っていただくとよいと思います。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 51（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第178号収録）を加筆・修正のうえ、転載。